

## 神田秘帖

### 「15. 日本透析医会創世期を彩った人々—2」—— 山崎親雄

この神田秘帖シリーズは、法人化され日本透析医会（以後医会とする）雑誌が発行される以前の資料（前回、段ボール10個ほどと書きましたが、「神田秘帖 1」に書きましたように、正確には7箱です。このあたりがたびたび書いてきました私の大雑把なところを。）を基に、先人から語り継がれた話を、稗田阿礼のように口伝（だから話の内容の半分以上は噂話の域を出ない）としてまとめてきましたが、前回でも予告しましたように、最終稿となりました。

前は医会法人化直前の、日本腎不全対策協会に関係した方々を紹介させていただきました。最終回は、まさに法人化された時点での医会執行部の方々です。

#### 稲生綱政初代会長

東京大学医科学研究所の外科教授時代に書かれた当時としては唯一の教科書「人工腎臓」を上梓され、犬の肺を用いた血液浄化研究が印象的でした。まだ血液透析療法が広く臨床応用される前のもので、教科書というより研究の書と言えるかもしれません。

医会活動への参加は、多くの大学関係者や学会関係者が躊躇される中で、平澤先生の強い要請もあって、透析医療の社会的側面の重要性（先生自身がそう語っておられます）に理解を示されたものと思われます。当時の医会は、金儲けの集団と誤解され認識されていた部分もあって、学究肌の稲生先生は、日本透析医会が堂々たる学術専門集団であることの証でした。医会法人化5周年の厚生省課長の挨拶に、「絹のハンカチ（東大教授）を泥（日本透析医会）で汚してまで」という稲生先生に対する表現がこの状況を物語っていると言えます（神田秘帖 3）。

医会会長をリタイアされた後も、医会主催のカレントトピックスなどには必ず出席され、静かに聴講されておられました。

#### 平澤由平二代目会長

前回、小高先生と太田先生を、わが国透析医療を牽引した3人のおうちの2人と紹介しました。3人目は間違いなく平澤先生です。古今を通じ、わが国最高の臨床透析医と考えています。その理由は、①アルミニウム（Al）骨症やAl脳症に早くから気づき、医会を通じて全国の水道水Al濃度を測定し、逆浸透（RO）処理が必須であると提案されたように、透析臨床の先端を走りながら、新しい知識を広めたこと、②新潟大学

から信楽園病院に維持透析の場所を移し、質の高い診療が展開されたことは、全国のサテライト施設の見本となったこと、③この時点で、MSWを含めたすべてのコメディカルが参加する包括医療を展開し、全国の透析診療所といえども栄養士やMSWが配置されるに至ったこと……などがあげられます。

透析医は欲張り、すぐ大金持ちになる……という世の悪しき風評を、良質な透析医療と、災害対策など患者支援を前面に打ち出した医会活動は、平澤先生の時代に確立されました。多くの優秀な後輩を育てたことも誇るべき業績です。また良質な医療の典型とされる場所は透析施設へのRO装置の導入で、これがわが国の治療成績が世界一であることを担保したはずで、繰り返しますが、わが国最高の臨床医でした。

医会の会議が終わった後、よく「やぶそば」で語り合う機会がありましたが、先生は必ず「かも南蛮」でした。お別れの会で、患者さんには食事の大切さを説きながら、自分は全く意識していなかったと、奥様からお聞きしましたが、そんなこともありかと。

#### 太田裕祥副会長・専務理事

生まれは神田で箱根の向こうにはお化けが住んでいるというのが口癖でした。医会事務所が神田にあるのは、太田先生の希望によるところが大きかったと推測されます。

医会へは、都道府県連合会から医会への移行期に参加されたと思われ、社会保険中京病院院長時代に、名大分院から太田和宏先生が赴任されたのを契機に、日本で最初の社保病院での透析室を立ち上げられました。

そのころから、愛知県・名古屋市の行政、腎不全・透析治療の研究と普及にまい進する名古屋大学附属病院分院内科、腎生検を中心とした腎疾患研究に従事する名古屋大学腎グループ、臨床腎移植を実践する中京病院と関連する泌尿器科グループおよび名古屋第二日赤病院、全ての民間透析医療施設などを包括した愛知県腎不全対策協議会が立ち上げられ、その中心が太田裕祥先生でした。実に上手な人使いでした。もちろん、医会の前身の腎不全対策協議会は、愛知県のこのシステムを見本としています。

しかし太田先生が最も誇る業績は、医学や医療行政の世界ではなく、わが国の女子バスケットボールが、初めて国際大会に出場した時の三菱電機名古屋の監督だったこととご本人から聞きました。

#### 山川真常務理事

法人化されて医会の目標は透析医療の質の向上とされましたが、80%を占める透析患者を管理する民間透析施設の医療の質の向上は、基礎に経営の安定があってこそ……と言えます。その意味で、先生は全国の民間透析施設の代表として執行部に入られたと思われ。

ところで、当時もっとも民間透析施設にとって大きな関心事は、感染性廃棄物の範囲と処理費用でした。場合によっては医療施設側の大きな負担が予想されたことによります。この、感染性廃棄物処理に関する委員会の担当理事が山川先生でした。私も委員の1人として参加させていただきましたが、最終的に、ウィルス肝炎患者に用いたダイアライザーのみが感染性と分類され、残りは主治医の判断によるとされたのは先生の業績でした。

しばらくしてすい臓がんを患い、越川昭三先生が会長で横浜で開催された日本透析医学会へ、奥様の介助で車いすに乗って出席され、皆様にお別れされておられたのが印象的でした。

#### 松田鈴夫理事（時事通信社厚生福祉編集長）

なじみのない方も多いと思いますが、ある意味では、この方がおられたからこそ、医会の法人化が可能だったといっても過言ではありません。取材を通じて厚生省の現役課長・局長からOBを熟知されておられ、

医会活動内容に合わせて、担当者を紹介していただきました。前号で紹介しました翁久次郎先生を、医会法人化に向けた理事として斡旋していただいたのも、松田先生でした。

加えて専門の福祉分野から、透析医療に関する問題を指摘されております。①なぜ人口当たりのわが国透析患者数が多いのか。早期発見と治療体制が不十分では？ ②QOLと生きがいに焦点を当て、多職種がかかわる包括医療と、社会福祉の側面からのアプローチが必要なのでは？ ③継続的なマンパワーの質と量の確保……について提案されました（医会雑誌、4（3）創立一周年記念シンポジウム「明日の腎不全対策—末期腎不全について—」）。まさに今、透析医療の問題点となっている点を、先見性をもって指摘されたこととなります。

その後は、国際医療福祉大学教授として活躍されました。

#### 吉田豊彦常務理事

鈴木満先生のよき理解者でした。日本泌尿器科学会の保険委員でもあり、診療報酬改定時の正確な情報は、誰よりも早く医会へもたらされました。現在も続いています保険審査担当者による保険診療に関する会議（透析保険審査委員懇談会）は、先生の提案でした。

また、特筆すべきは、先生自身の医会での仕事以外に、スタッフによる協力が医会事業に大きな影響をもたらしました。透析技術料への抗凝固薬の包括と引き換えに、悲願のROを用いた水処理加算が保険収載されましたが、その点数のもとになったのは、みはま病院内野順司君の臨床に基づく原価計算結果でした。また、メーリングリストに基づく災害時の情報収集システムは、同じく武田稔男君の設計によるもので、本部が現在の白鷺病院に移るまでは、ほとんど武田君個人が管理し、災害時の立ち上げを1人で担当されていました。

吉田先生とは、医会で一緒にさせていただいた最後の仕事が、エリスロポエチンの技術料への包括であったことは別の機会で書いています。

何度か一緒にゴルフをしましたが、鈴木先生や私とは違って、ギャンブルなしの堅実なコース戦略をお持ちでした。

#### 鈴木満常務理事

何はともあれ、医会の最大の功労者です。

都道府県連合会時代は、保険診療報酬改定一辺倒の事業内容に不満があっただけで、表には出てこられませんでした。小石川生まれの江戸っ子にとって、連合会会長の太田和宏先生は、箱根の向こうのお化けだったのでしょうか。

医会となってからは、法人化、臨床工学技士法の成立などに関して足しげく厚生省に通い、その真摯な対応は、厚生省の担当者に理解され、信望が厚かったと聞いています。

何度かお宅に泊めて頂いたときに、NHK解説で人気の梶原武夫プロをお招きし、指導碁を受けさせていただく機会がありました。鈴木先生はじっくり考えるのは苦手なようで、「えい面倒な！」と次の一手を打ってしまうことが何度かありました。いかにも短気な江戸っ子という風情です。しかし会議録で見る法人化に関する厚生省との交渉では、次々と新しい条件が出される中で粘り強く対応する姿が推察され、囲碁での対応とは全く異なるものでした。もっとも、囲碁で見る性格が、本質に近いと信じていますが。

最後に、半分愚痴と恨みを込めながら、平澤先生が退任を表明された後、ほとんどの関係者は鈴木先生が三代目の会長を引き受けられると思われたことでしょう。しかし固辞され続けました。会長よりも専務理事としての仕事をしたい、もう医会の仕事は終わりにしよう、後に日本医師会の理事を考えていた……などの

思いがあったと考えますが、本音は最後まで明かされませんでした。私が会長に就任後、厚労省にご挨拶に行きますと、「えっ、それじゃ鈴木先生はどうしたの？」という話から始まったものでした。

最終は、日本医師会理事として中医協委員となり、なくなっていた透析時間区分を復活させたわけですから、平澤先生の提案された水処理と同様に、わが国の良質な透析医療を担保した最大の業績といえます。

最後に、

創世期には在籍していませんでしたが、私自身の個人的な現況を、

いろいろなことがありまして、最近、何とか辞世の句を作りたいと俳句やら短歌やらをひねっています。

候補作を一つ、

かくあれと巻き上げられし自鳴琴 かくなりて止む最後はシの音

(かく鳴りて病む最後は死の音)

多少おふざけが入り、軽めのところが自分らしいと考えていますが、NHKや朝日の歌壇では、箸にも棒にもかかりませんでした。

さて、一旦絶筆を宣言した後、未練がましく、医会のための仕事だからと勝手な言い訳をし、5年にわたり書き続けてまいりました「神田秘帖」を、これを持ちまして終わりにします。

機会を与えていただいた会誌編集委員の方々、つたない文章をお読みいただいた方々にお礼を申し上げ、擱筆します。

日本透析医会名誉会長/増子クリニック 昴